

俳人協会新潟県支部報

No. 95

令和7年9月15日

第35回「花と緑」

新潟県俳句大会記

関矢紀静

梅雨明けの晴天に恵まれた7月20日(日)新潟市「朱鷺メッセ」にて第35回「花と緑」新潟県俳句大会が開催された。

この日は大変な猛暑であったが、79名の参加を得ることが出来た。また同じ日に、アイドルグループのコンサートも行なわれ、終了後は大変な混雑となった。

当日の受付は午前9時30分開始、当日句は夏季雑詠2句、締切は午前10時30分。

午前10時30分より開会となった。山口啓介支部長は、開会の挨拶のなかで、参加した会

員への労いと、講師への感謝を述べられた。続いて、山田真砂年評議員の紹介をされ、「俳句の方法」と題する講演となった。

山田講師は、事前の資料に基づき、「俳句の経済性」「比喻について」「オノマトペ」「中村草田男の方法」を講義された。

。経済とは、俳句は短詩ゆえに短い言葉を有効に使う。比喻とは、ある事物を別の事物に見立てたり、喩えたりすることで、対象を重層的に表現する。

。オノマトペとは、感覚を写し取り、特徴的な形式を持つ、新たに作り出せる言葉と、説明された。

また、中村草田男の字余りについては、特に時間を割いて解説された。草田男は、俳句は内容が大切とし、「感情、心理、思惟」を描くという。上五を字余りにすることで、間合を置かず直に訴える。と言われ次の句を例句に揚げ

られた。

。大学生おほかた貧し雁帰る
。金魚手向けん肉屋の鉤に彼奴を吊り
。雪女郎おそろし父の恋恐ろし

二句目の、金魚手向けん…の句の背景には、知人との金銭トラブルがあった様子など、身近な者でなければ知り得ない、貴重な話を伺うことができた。

最後に、県俳句大会委員長、矢澤彦太郎氏の閉会挨拶があり、午後3時30分無事終了となった。

◎当日作品の成績

山田真砂年評議員選

(特選)

出来合の総菜を買ふ海暑かな

(佳作)

夏菜夷はやつぱり渋し遠き恋

越野 蒼穹

夏祭移住夫婦も役ふられ

長野 光雄

いくつもの空蟬胸に餓鬼大將

平賀 寛子

明易し潮の匂ひの島の宿

井口 光雄

新潟の海青ければまた暑し

金子加津久

不機嫌な雲を残して梅雨明け

川崎 陽子

杓元のくづれぬ母や水を打つ

阿部佳代子

すべきことすべて中途に水を

石田なるみ

母の忌やいつもどこかに虹か

関口 道代

捕虫網試しに振ってふたつ買

高埜 健蔵

小流れのいつかは海へ青胡桃

小林 悦子



- 朝曇ぐいと呑み干す梅ジュース 榎木 幸子
馬鈴薯の花揺る島のヘリポー ト 大竹 健一
教室はポンドのほひ夕立来る 渡邊 久美
風鈴や京のみやげの香を焚き 小林 風千
手土産は両手で受くる夏野菜 籾本 春美
をりづるに根のかぎりを明易し 土屋 瞳子
すこやかといふ仕合せやさくらんぼ 大塚 明
羅に叱られてゐる翁かな 丘 のぼる
十葉や村に一人の生き字引 番場勢津子
- 合点成績
1位 渡邊 久美 佳10点
2位 川崎 陽子 佳9点
3位 小林 悦子 佳9点
4位 遠藤 宜秀 佳8点特2
5位 高埜 健蔵 佳8点特1
6位 長野 光雄 佳7点
7位 渡辺 徳治 佳7点
8位 本間 悦子 佳7点
9位 真野 幸子 佳7点
10位 番場勢津子 佳6点特1
11位 坂井 文繪 佳6点特1
12位 越野 蒼穹 佳6点
13位 阿部佳代子 佳6点

- 14位 籾本 春美 佳6点
15位 倉井 幸子 佳6点
16位 池田亜紀子 佳6点
17位 下條 春秋 佳5点特1
18位 寺尾亜真李 佳5点
19位 村山 靖子 佳5点
20位 小出 利恵 佳5点
- 次点
天野三佐子 佳5点
山崎 節 佳5点

※なお上位20位迄を入賞としました。同点句の順位は特選句を上位とし、なお同率の場合講師の選及び受付順としました。



令和七年七月二十日
第三十五回
花と緑新潟県
俳句大会募集句

【各選者特選句】

- 山田真砂年先生選
雪解靄村の真中に瞽女の宿 関矢 紀静
雪形や委託に決めし田を見やる 大島 小春
老いるとは父に似ること秋深む 丸山 修
井上 弘美先生選
地言葉の人に連なる里桜 長谷川みきこ
鎌を研ぐ匂ひどこかに風光る 下條 春秋
湯も水もひとつの蛇口二月尽 土屋 瞳子
上田日差子先生選
土筆野の風にならむと父逝けり 木曾 武子
柱時計は家の中心昭和の日 関口 道代
雁帰る失ひしもの無きやうに 土屋 瞳子
片山由美子先生選
てきぱきと勢子の差配や牛角 村山 靖子

- 夕暮の風ざわざわと座禪草 伊藤 恭子
蠅虎小さく跳んで逃げもせず 大谷のり子
菅野 孝夫先生選
彼の世よりうかとこぼれて昼寝覚 袖山 リエ
幸せの熱源は母山笑ふ 宮 京子
春愁や厨に蓋の開かぬ瓶 樋熊 節子
小島 健先生選
余命告知外れ七年青き踏む 袖山 リエ
思ひ出は笑ひに変へて昭和の日 高野 修子
補聴器を新らしくして子供の日 畠野 旬子
しなだしん先生選
木洩れ日にまぎれあけびの花の色 今井 慶子
借り物の長ぐつ重し溝さらへ 秋山 保子
野遊びの果てに立寄る母の家 関口 道代
中原 道夫先生選
ふらここやたとへば空の数へかた 渡邊 久美
老いるとは父に似ること秋深む 丸山 修
鮎を剥ぐ竿のしなりや瀬音より 伊野 智彦
山口 啓介選
全村といへど六軒初燕 山本 信義
知らぬ人そそくさと来て田を打てり 小林 正男
集落にたつたひとつの鯉のぼり 籾本 春美
井口 光雄選
合掌を解けば流灯はるかなり 木曾 武子
下船して走り来る子の夏帽子 絹澤 裕子
青空をすり抜け実梅落ちにけり 涼野 海音
矢澤彦太郎選
手をつなぐ上皇さまに囁れり 金子加津久
老木のやうな父の背山開き 井口 光雄
日溜りは母のぬくもり花は葉に 小出 利恵
赤塚 五行選
さざなみは風のささやき湖五月 澤田 れい
この車庫が一番好きと燕来る 鈴木けい子
その下を鯉の潜るや花筏 片桐さと子
井澤 秀峰選
昭和の日母在りし日の塩むすび 金子よし子
職人の荒れし指先桜餅 金子加津久
甚平や出世には縁の無き父子

石黒 正勝選	水野 宗子	方 渡邊 久美	る 大島いと女	雪解靄村の真中に瞽女の宿	夕暮の風ざわざわと座禪草
万緑や赤子が握る生命線	大島いと女	夏めくや嫁の野良着はサイケ	黒塀の花街てふ路地糸柳	8位 5点(内特1) 関矢 紀静	19位 4点(内特1) 伊藤 恭子
プラタナス五月の風の透き通り	小林 悦子	宮 京子選	なにをしに二階の己れはたた	母の日の母に着せたり履かせたり	うららかや母の加はる糸電話
青時雨母の形見の鼓の音	鶴巻 悦子	春の雪いつしか妻と仲直り	神 渡辺 徳治選	9位 5点(内特1) 高埜 健蔵	20位 4点(内特1) 村田 恭子
川崎 陽子選	大島いと女	人に会ふまで葉桜の径歩きけり	鬱といふ穴から覗く小さき春	木の瘤に父のまぼろし榛の花	余命告知外れ七年青き踏む
万緑や赤子が握る生命線	大島いと女	うららかや母の加はる糸電話	老いてなほ未知の老あり白芙蓉	10位 5点(内特1) 矢澤彦太郎	21位 4点(内特1) 袖山 リエ
老妻のかすかな寝息遠蛙	村田 恭子	合掌を解けば流灯はるかなり	一本のバラに罪あり佐渡へ嫁す	春愁や厨に蓋の開かぬ瓶	彼の世よりうかとこぼれて
熊谷 國男選	矢澤彦太郎	春虹のどの色ならむランドセル	【高得点句】	11位 5点 榎熊 節子	昼寝覚 袖山 リエ
初蝶に力をもらふ試歩の径	本間 安彦	花林檎北信五岳近く見て	1位 9点 播鉢の大きすぎたる木の芽	植田風吸うてその夜を青くある	22位 4点(内特1) この車庫が一番好きと燕来る
昭和の日母在りし日の塩むすび	金子よし子	山口あつ子選	2位 8点 和へ 土屋 瞳子	12位 5点 白髪ジャズバンド来て島は夏	23位 4点(内特1) 鈴木けい子
看取り終へきのふと違ふさくらかな	土屋 瞳子	下船して走り来る子の夏帽子	一枚の空千枚の代田かな	13位 4点(内特2) 渡辺 徳治	24位 4点(内特1) 金子加津久
寺尾亜真李選	高埜 健蔵	余花の雨書斎はいつも手暗がり	3位 6点 山みちに海のほひや良寛	14位 4点(内特2) 関口 道代	25位 4点(内特1) 水野 宗子
母の日の母に着せたり履かせたり	袖山 リエ	看取り終へきのふと違ふさくらかな	4位 6点 老い支度ゆつくりやれと亀の鳴く	15位 4点(内特2) 大島いと女	鎌を研ぐ匂ひどこかに風光る
草木薙ぐ地球の怒り出水川	水野 宗子	山之内喜七選	5位 6点 まつすぐに並んだつもり一年生	16位 4点(内特2) 下船して走り来る子の夏帽子	下條 春秋
数式の割り切れぬとも涼しかり	伊藤はる子	野遊びの果てに立寄る母の家	6位 5点(内特2) 大島いと女	17位 4点(内特2) 絹澤 裕子	四点句で特選の有る句迄を入賞としました。尚、同点句の順位は特選句を上位とし、更に同点の場合は、作品の受付順とさせて頂きました。
春川 暖慕選	伊藤はる子	スキップに始まる助走五月来	7位 5点(内特1) 大島いと女	18位 4点(内特1) 土屋 瞳子	
水中花化石のやうな嘘ついて	伊藤はる子	う 若井 新一選			
ふらここやたとへば空の数へ	伊藤はる子	スキップに始まる助走五月来			

旬会報

「青山」新潟加茂旬会

令和7年6月10日(火)

会場・三条市まちやま

日を受けて新樹は枝葉輝かす

島野 旬子

衰へぬ夫の健啖豆の飯

広川美津子

移されて指間に光るほたるかな

森 貞子

竜笛の響く神社の薪能

足立 宏子

一望の翠巒一望の青田

田中 幸子

薔薇の香の漂ふ居間や書をひろぐ

八子 栄子

(報・八子栄子)

「汀にいがた」旬会

令和7年6月21日(土)

会場・上越福祉交流プラザ

故郷の味の一つや笹団子

小田ゆかり

父の日や懐中時計の鎖金

風間 照子

薄衣口に溶けゆく和三盆

小林 淑江

夏至の夜の時空を醸す古きチエロ

櫻井 詩子

谷の水引きて涼しき厨かな

櫻井 八石

縄のれん馴染の店の夏料理

たかだ雁木

万緑を分け行く古道塩の道

筑波 文枝

山道へアカシアの花揺れ止ま

早川智恵子

茄子漬や桶より母の色つかむ

古川よし秋

更衣母の遺せし金指輪

山岸 幸子

路地裏は一方通行燕の子

山本 信義

新緑や生命の萌えを教えらる

吉村 直彦

大茅の輪潜り昼酒つつしめり

井澤 秀峰

(報・井澤秀峰)

春耕長岡旬会

令和7年5月16日(金)

会場・宮内コミュニティセンター

葉桜やあつげらかと時刻む

佐藤 譲介

夏帽子選び三つ四つ若返る

高橋 ヨシ

逝く春やコーヒー豆を吟味する

種村 政己

近付いて見たし遠目の芝桜

石橋紀美子

薄化粧のやうに藤房軒を這ふ

伊丹 文男

若葉雨白寿を迎へ父逝けり

谷内田竹子

牛鳴いて薫風の道ひろげゆく

平賀 寛子

(報・平賀寛子)

「銀化」とねりこ旬会

令和7年5月25日(日)

会場・万代市民会館

怖気付く長さの蛇でなし跨ぐ

中原 道夫

踏んばりのきかぬかなしび水馬

越野 蒼穹

わが胸に河骨りんと鳴りゐたる

小林 智湖

デジタルを知る由もなし落し文

十見 達也

薄暑光緑内障の入口に

丘 のぼる

今宵こそ一興として火蛾となる

織田亮太郎

味のせぬ音楽その後髪洗ふ

山崎 未可

ゴキブリに無駄に時間をとられけり

白川 博

唇に声無き別れ山若葉

金子 富也

夕日まで泥塗れなる田植かな

西村みかん

星の名を知らざる人や登山宿

横川 湯八

昼寝にはちと不向きなり広辞苑

織原 芳晴

青嵐路地に弾ける子らの声

畠山 典子

靴音に白ぼうたんの崩る夜

石塚 わこ

湯へ放ち涼しき色に茹で上がる

寺尾亜真李

(報・寺尾亜真李)

「河」新潟支部六月例会

令和7年6月8日(日)

会場・新潟市万代市民会館

つくばひの水は静かに初つばめ

川崎 陽子

三樹彦の赤シャツに夏来たり

春川 暖慕

竹床几行きつ戻りつする話

宮 京子

短夜やナースコールの続きを

倉井 幸子

八十の三つ児にまぶし植田かな

小出 利恵

サンマルクのアイスコーヒー

斉藤 忠吉

滝の音身のうすうすと透けり

けり 田中 啓子

麦の秋ふるさと行きのバスを待つ

広瀬喜代子

夜の風祭笛吹く子の袂

榎熊 節子

柿の花落ちさうコーヒーこぼれさう

関矢 紀静

(報・関矢紀静)

一六俳旬会

令和7年6月20日(水)

会場・柏崎市民プラザ

火の匂ひさせて飛び立つ兜虫

水野 宗子

笑い合う羅漢もおわす若葉萌

植木 弘子

昭和負ひ長嶋夏の黄泉の旅

歌代 保利

たまわりし句集のみやび山桜

植木 登美

初夏の佐渡金の入らぬ鮎を買

品川 芳子

護摩堂の紫陽花めぐり藍の濃

清水 泰月

亡き父の持ち歌歌う梅雨の夜

真貝 健作

粽解く色香楽しむ昼の雨

高橋 輝子

庭の畑茄子の成長日日見詰め

庭山 良子

和太鼓の腹に響きて梅雨晴間

星野 五月

笹の葉に水滴落ちる棕かな
前沢 陽子
白蓮の池の隙間の蒼さかな
若林真理子
草いきれ守り人逝きて兵の墓
上野 昭一

(報・上野昭一)

涛俳句会七月例会

令和7年7月13日(日)
会場・クロスバール新潟

青田道ゴム長重き朝かな

悦子

青田風小一時間の散歩道

かづ子

美容柳群れて暮れゆく社かな

國男

中学生茅の輪潜りつつ談笑

啓子

昼顔や海の青より淡き佐渡

笙

じゃじゃ降りとなりたる樺美

ひとし

着陸のぐんぐん迫る青田かな

レン

目覚めむれば帰郷の車窓青田
かな

わこ

(報・熊谷國男)

私の吟行地

徳昌寺附近

相澤 秋生

徳昌寺は与板の町を俯瞰する山の中腹に在る。且て、新潟国体の聖火台の原型となつた火焔式土器も出土。又、NHK大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼続の菩提寺だ。百五十段ほどの磴を上ると鬱蒼たる老杉の林の中に山門が在り両袖の格子の奥に一对の仁王像が佇つ。この像は遠く高麗国から渡来し、上総国君津の某寺に祀られていたが戦火で寺は焼かれ仁王像だけが奇跡的に災禍を免れたので「弾丸除け仁王」と信仰されたと云う。由あって昭和初頭に旧与板士族大橋氏が当寺に寄進。出征兵士やその家族の信仰を集めた。幾星霜と流転の裡に損傷・落剥が目立つ。静謐に満ちたこの台地は私の最も魅かれる吟行地だ。特に晩春晩秋が好い。《落剥の仁王に花の降るはよし 秋生》

良寛の父橋以南の生家割元庄屋新木家跡であり、以南の句碑も建てられている。

秋生

三面川から笹川流れ

鈴木 正芳

私は村上市の南部、荒川地区在住ですが、生まれ育ちは村上市の中心部、三面川（みおもてがわ）の近くです。

新潟県はご存知の通り新潟市西区から村上氏の三面川までの海辺は長い長い砂浜となっており、三面川を越えると岩礁地帯が現れて景色が一変します。そしてそのまま北上すると景勝地である笹川流れ（さががわながれ）に到着します。すぐ近くですので、吟行に限らず、車やバイクで気分転換によく行きます。

春夏秋冬にそれぞれ素晴らしい顔を見せてくれますが、特に気に入っているのが厳しい冬が終わり浅春の風が吹く頃のキラキラとした穏やかな海の景色です。磯の香りも心を癒してくれます。

また海の方こうには粟島があり、笹川流れに近づくにつれてどんどん大きく見えます。

みなさまに是非とも足を運んでいただきたい場所です。岩百合や心をいつも穏やかに

正芳

歴史ある沢将監の館

寺尾 亜真李

私は、蒲原平野という豊かな稲作地帯に住んでいる。とある秋の日、地元の俳句仲間数人と西蒲区中之口へ吟行に出掛けた。

田圃に囲まれた中之口の集落の一角に、威容を誇る館がたたずむ。沢将監は、もともと甲斐の武田家の家臣で、培った治水技術を中之口で生かし新田開発に力を尽くした。

沢家は石高5千石の大庄屋。ケヤキの太い柱や梁がふんだんに使われ、殿様の本陣として使われた「藩主の部屋」もある。その部屋から望める庭は趣深い。水澄む池、よく手入れされた松、青々と枝葉を

繁らせた竹、薄紅葉など、句材がふんだんにある。

館を後に、門田のハザ並木へ向かう。地元ではタモギと言っている稲架並木。稲架は柁の木に木材を組み立て、刈り取った稲の束を天然乾燥させるもの。此処はその名残をとどめている。

江戸の世を昨日の如く水澄めり

秋風を集めて空ハザの並木

亜真李



俳句は楽しく継続は力

上野 昭一

私の俳句への関わりは先の大戦後の混乱も収まり経済発展の始まった昭和三十年代、農村から都会への労働力の移動が始まった。農家の長男の私も時代の波、知人の紹介もあって自動車関連の会社に入社することが出来た。この会社には昭和十五年創部の俳句クラブ鈴懸け吟社があって地域では活発に活動していた。指導者は県内で名実共に実力者の小林一峰氏である。私はこの会の世話方の熱心な勧誘を受けた。生来、私は俳句に感心があったので、あまり深く考えずに承諾した。年齢は三十歳前、会員は職場俳句会の関係で思うに随分若い方が多かった。句会は月一回で会社の会議室は明るい雰囲気であまり深く考えずに承諾した。年齢は三十歳前、会員は職場俳句会の関係で実施され、時には、会社近くの会員の自宅で句会が持たれることもあった。茶菓の接待は勿論のことときにはお酒に招ばれることもあって、今思うに家族の方に迷惑をかけていたなと反省するばかりです。

当時、私の俳句はマイペースで、季語に農業関連の言葉が多いので実に幼稚で一人善がり師や先輩に迷惑を掛けていたと反省するばかりです。兼業農家の私の家は農村部、戦後の町村大合併で市に吸収合併されましたが冬は雪深い辺鄙の土地です。ここで田畑二町歩弱の自作農で、場所としては刈羽平野を一望する里山の接点、戦国時代まで越後上杉家の家臣安田毛利の山城跡現在は城址公園として隣接する工業団地とともに市民に親しまれている。

この城址公園は自然が一杯で子供たちの絶好の遊び場であったが今は野生動物の出現で利用者が少なくなっている。この城址公園は地域の人の誇りで大切に守られている。私も場所柄特に親しみを持って自然や樹木草花等に初心の頃より句に詠んで今日に至っている。この城山に特筆すべきは山櫻そして夏椿の群生、またうぐいすは春からお盆まで鳴き続けている嬉しい限りだ。

自然豊かな城山の足下の我が家、三方を里山に囲まれ山続きの広い庭には四季折々の花が咲き、句心くすぐってくれるが、あまり身近か過ぎ初心の頃から句に詠んでいるがいい句は生れまない。春から、梅・桜・こぶし・雪割草・おうれん・水仙・菖蒲・あやめ・水芭蕉・雪の下・夏椿・薔薇・振花・銀杯草・薊・桔梗・芙蓉・夏坊主等々次々咲いています。

鈴懸け吟社入会後間もなく柏崎・刈羽俳句作家連盟に参加し、車の運転が出来たので事務局の手伝いと言う裏方の仕事をやっていた。

初心の頃から地域の句界の手伝いと句友に恵まれた事が俳句を六十年余の長きに亘り続けてこられたのでしょう。

ありがとうございます。

俳句・初心の頃

秋元不死男 のこと

水野 宗子

昭和五十年に俳句結社「かまつか」に所属したことが私の俳句の原点である。何もかもが新鮮で楽しく作句に打ち込んでいたことを思い出す。

リケンの職場句会で勉強中であったある日、地元の竹田青雨先生が「作品が出来たら私に見せて下さい」とお声を掛けて下さった。先生は秋元不死男門下であり不死男を心から尊敬しておられた。竹田先生の影響で私も不死男の著書は俳句も含めて全て手元に集め繰り返し勉強した。著名な俳句作家では私は今でも不死男が一番好きである。戦前の国家治安維持法の無実の罪で長く牢にぶち込まれ、戦後釈放されて詠んだ句が「鳥わたるききききと確切れば」であった。

確か「俳句もの説」を最初に提唱したのは不死男であり、この不死男のものを説をこんこんと解いて下さったのが竹田先生であった。竹田先生の指導はとても厳しく手紙で三〇句送っても「こんな陳腐な句は私に見せる価値もない」とにべもなかったこともあった。「俳句はものを詠む」と繰り返し言われたが、最初の内はその教えをなかなか理解出来ず先生をがっかりさせていたと思う。竹田先生に褒められたいいつも思いながら作句をしていたと思う。「俳句はものを詠む」が少しずつ私の中にしみ込んでいき益々不死男の句の虜になった。

不死男はオノマトペの名手でもあった。

「へろへろとワントタンするクリスマス」「多喜二忌や糸きりきりとハムの腕」「ライターの火のポポポと滝涸るる」など名句である。

不死男は俳句だけでなく文章も上手く、自選自解は何回読んでも飽きない読み物である。「降る雪に胸飾られて捕へらる」「明日ありやあり外套のポロちぎる」「冷されて牛の貫祿しづかなり」「終戦日妻子入れむと風呂洗ふ」などの句にも不死男の物語があり、この一冊を読み終わると分厚い重厚な一人の一生を読んだ後のような充足感さえ感じる。

俳句初心の頃に出会ったのもろのことは全て私の宝物である。

もうすでに五十年も俳句と関わってきたことになるが、師や先輩や句友に恵まれつくづく幸せなことであった。感謝しかない。

草青む

稲垣和江(鶴・朱鷺)

雪囲ひ外し明るき部屋とする
 大き鍋出して眼張を煮付とす
 一パック求め帰りしめかぶかな
 近道は雪が深くて回り道
 凍る朝店長の撒くすべり止
 よろこんでをられぬ寒の戻りかな
 草青む畑仕事に急かされし

萩の風

大橋節子(野火)

レシピ読めど最後は我流夏料理
 Tシャツを汗ごと脱いで一日終ふ
 夏霞はるかに佐渡の漂へる
 琴を弾く豊かな時間萩の風
 雪吊や一声掛けて縄飛ばす
 真夜中の一口の白湯雪明り
 野も山も強張つてゐる深雪晴

貝風鈴

菅井悦子(沖)

束ね置く剪枝に梅の二・三輪
 芽柳や阿賀の川波たたみ寄す
 師の忌来る菓舗に走りの葛桜
 青梅雨や墨痕匂ふ八一展
 手の甲の血管あらは夕焼くる
 羽抜鳥短き関を作りをり
 貝風鈴意のあるごとく鳴り止まず

時の移ろい

横森宏子(航)

戦争は画像の彼方月仰ぐ
 溪谷の吾亦紅より暮れ初めぬ
 初雪やきりりと結ぶ割烹着
 おほらかな夫こそよけれ冬ぬくし
 着ぶくれて太くなりたる肝つ玉
 サングラス世間一帯セピア色
 ふるさとの大河にかかる虹二重

私の近詠



『私の近詠』は原則として、
 アイウエオ順に掲載。(編集部)

燕の仕入れ

伊野智彦(銀化)

店頭の燕も今日の仕入れかな
 若駒の遊びを凝視調教師
 球根の血を吸ひ上げてチューリップ
 葉桜や今退職をかみしめる
 鰻屋の完全予約香も出さぬ
 梅の雨歩幅は傘の中にある
 レシピとか収集日とか冷蔵庫

山若葉

下條春秋(風の道)

白雲を押し上げてゐる山若葉
 蒼天は国境もなく鳥帰る
 水湛へ棚田幾重に新樹光
 炎暑にもいつも和顔施地蔵尊
 海風が山風となりつくつくし
 名暮やゆうぐれ色の蕎麦の花
 夕映えの風の讃歌やすすき原

海に沿ふ町

矢尻ゆきを(なし)

越後平野なべて青田と成りにけり
 ガラス器に水を満たして七変化
 夏野菜カレー大盛クッキング
 海に沿ふ町に生まれて海遠く
 夏の昼吹き抜ける風味方とす
 梅雨明けと刑の執行伝えをり
 薊心てふ吟詠の号夏薊

平和

渡辺徳治(鷹)

初夏や青年医師の二色ペン
 朝刊を大きくひらき夏兆す
 母の日に母を叱りて終ひけり
 父と子のすこしちかづく夏休
 冷蔵庫の一番奥に父の酒
 子供らの金魚見てゐる平和かな
 外つ国の戦禍の止まぬ梅雨夕焼

事務局だより

幹事長 熊谷國男

◇第35回「花と緑新潟県俳句大会」を7月20日(日)開催しました。当日の参加者は79名で昨年より16名減少しました。

大会は講師の山田真砂年先生(俳人協会評議員)より演題「俳句の方法」についてのご講演をいただきました。最も短い詩と言われる五七五の「俳句」は言葉を有効に使って一句を作らなければなりません。いかに表現の幅を広げるか、そのために様々なレトリック(修辞法)が使われてきました。その代表的な方法として比喩があります。比喩には「直喩」と「暗喩」があり、類似性・共通点をもって対象を重ねるに表現する、文芸の重要な方法です。比喩の例句をいくつか挙げられました。講演でプロジェクターを使い、スクリーンに例句を映して説明されました。さらに、オノマトペ(擬音、擬態、擬情)の有効性、最後に中村草

田男の句集から例句を挙げ、「字余り」は上五を字余りにすることに触れ講演を終えました。俳句の実作にたいへん参考になる有意義な講演であったと思います。

◇大会当日、同じ朱鷺メッセで「なにわ男子」のコンサートがありました。そのため、午後3時から5時の時間帯には会場はもちろん、朱鷺メッセ周辺は来場者であふれ、道路は車で大渋滞が続きました。大会に参加した皆さんはその帰り道、たいへんな目に合っていました。今後は、大会開催日程の配置について注意していきたいと思っています。

◇今年度の大会での応募句の590組180句。昨年は661組、1322句でした。昨年より71組応募句が減少しています。令和4年度以降、減少傾向が続く、とうとう600組を割ってしまいました。令和4年と比較すると160組減少しています。この県俳句大会の運営経費は応募

句の投句料で対応しています。今年の大会収支は赤字は必至です。来年度以降の大会運営について根本的な見直しが求められる状況になっています。

◇支部会員の消息

(敬称略)

1. 新会員の紹介

(7月1日入会)

相田登久子 長岡 香雨
清水ひかり 見附 香雨

2. 退会

市川 輝子 上越 雛
和栗 痴龍 新潟 銀化

第8回新潟県支部俳句大賞のご案内

実施要領を県支部報95号に同封いたしました。奮ってご応募願います。

第15回新潟県吟行会のご案内

今年は10月18日(出)加茂山周辺で開催します。実施要領についても本号に同封いたしました。

(編集後記)

「佐渡島の金山」が国内で二十六番目の世界遺産に登録され、七月二十七日で一年になりました。島内への観光客は二割ほど増え、外国人観光客も増えているとのこと。

昨年の六月に佐渡に住む友人から案内してもらい、佐渡を観光してきました。世界遺産登録の直前でしたが、その数年前に訪れた時に比べ、お洒落なカフェやお店が増えたという印象でした。世界遺産登録に向けてまちが動き出しているように感じました。

今年五月には「佐渡島の金山」保存活用推進ネットワーク」が発足したそうです。将来にわたる価値の継承とともに持続可能な地域の発展を期し、個人をはじめ企業、団体、行政等の力を結集した地域社会総がかりでの保存活用の取組を推進するとしています。これからの様々な取組が期待されます。

(旗本春美)

「一物」「二物」について。よく季語との、付かず離れずが、句会などで論議がされますが、それは、「二物」の場合です。「一物」にはそれはありません。季語が動く、動かないも基本的には一物にはありません。一物は季語を詠んでいるわけですから。という一物は、楽のように思う人もいるかもしれませんが、それがまたそうではないのです。一物は季語の本質を詠むわけですから、よほどの発見や意外性がないと、説明になる危険があります。また一物は、今まで詠みつくされていると言っても過言ではありません。二物は自分の思いや、見たもの、形あるもの、無いものにかかわらず、季語をつければ、俳句らしくなるとも言われています。あとは季語とその他十二音は読み手が想像してくれるわけです。このことは、ほとんどの入門書に共通して言われていますから、そうなのでしょう。省略の隙間を、選者が「物語」を作って、上手に埋めてくれるからだそうです。選評を聞いて、初めて俳句の良否がわかったというのは、このことから来るのだと思います。これは、すべて省略からくる俳句の特殊性だと思っています。だから、ちょっと過激な言い方をお許し頂ければ、当然私も含めて、ほとんどの選は物語の選と言うことになります。

(渡辺徳治)